慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	野村兼太郎著 改版 経済的文化と哲学
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.9 (1921. 9) ,p.1355(143)- 1357(145)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のなり。然れども直接ある一の精神と他の精神とは交渉し能はず。必ず外界の表象として肉體の仲介するを要す。而して此の肉體の媒介の發達に關して、氏は最も興味多き敍述をなせども、こゝにはすべて割愛す。讀者は直ちに本書及び前掲「言語史原理」に就きて、如何にして人類が意思を表現せんとしたるか、其の變遷の跡を辿らるべし。要するに其の結論となすものは、交互作用の最も完全なるものとして現在の發音言語（Lantsprach）發達するに至り、（言語には Gebärden-sprache とて容貌を以つて意思を表示するものあり、）一つの精神と他の精神と略々完全に交渉し得るに至れり。（二六頁）而して文化が進歩するは是等の交互作用が更に廣きに亘ればなり。例へば各家族がその消費物をそれ自身生産する原始的經濟階段と現在の如き交易經濟時代とを比較すべし。其の間の文化の相違は極めて歴然たるべし。他方更に吾人が過去の事實を熟知することは又文化の進歩に貢獻あり。然し乍ら其の歴史的研究の主たる任務は「過去の時代に生せる文化價値を崩壊より保護し、而してすでに現在に隱されたる點を新生活に喚起する」ことにあり。（五三頁）尚ほ其の歴史研究の方法、殊に其の偶然論（Zufall）其の他（四〇頁以降）興味多き議論あれど、他に紹介すべき機會ありと思惟するが故に、こゝにはすべて省略し、直ちに以上の如き觀察と其の科學論との關係を略述すべし。

歴史的科學の眞の目的は世界に於ける吾人の指向法（Orientierung）を求むるにあり。而して事物間の因果關係を究める範圍に於いて眞の科學たることを得べし。そは個々の事實を孤立的に明白にすることを以つて滿足すべきにあらず。因果律の認識に比較（Vergleichung）は缺くべからざるものなり。現象間に於ける一致（Uebereinstimmung）は正確なる分析に依つてのみ到達し得。而して斯くの如き一致の方法を系統的に研究せんと努力する時、こゝに原則科學を生ず。斯くの如き原則科學は正確なる細節研究（Detailforschung）と相伴ふて始めて價値あるものなり。故に原則科學は發展に於ける目的意識の聯結の爲めに、歴史的研究をあらゆる方面に於いて利用すべきものなり。而して如何なる動機に依つて最初より條件づけられたるか。又其の動機は繼續せりや。是等を熟考し、以つて一方古きを確立すると共に、他方新しきを評價す。それ等の研究に對して言語の研究は資するところ極めて大なりと思考す。（五六頁以降）

以上本書の大體を紹介せりと考ふ。尚ほ是等に關する問題は目下本誌に連載中の拙稿「經濟史研究に就いて」と密接の關係あり就きて參照せられんことを希望す。（野村兼太郎）

野村兼太郎著　**改版　經濟的文化史哲學**

芝三田國文堂發行　四六版　五〇八頁

經濟學における一新傾向は、經濟學の哲學的考察であらう。著者野村氏は、夙に此の傾向に着目し、之を研鑽せられること頗ぶる深いものがある。本書の第一版の上梓せられたのは昨年の六月であつた。從來一ヶ年本書に對する學界の需要は、本書の著者をして第四版を出版せしめるに至つた。改定第四版においては、「全體に亘つて文意其の他の訂正をなし、更らに第四篇と第五篇とに其後發表した論文を各一章（「古代における家族制」「ギルド社會主義の根本觀念」）づゝ增加した。」（序文）評者は今全體に渉つて、舊版と改版とを比較するの餘裕を持つてゐなかつたので、改版讀過の際における感想を述べるに止めやうと思ふ。

本書の序「眞を求めて」は洵に朗々誦すべき名文である。讀者は何人と雖も、その流麗な筆致に魅せられざるを得ないであらう。この名文を讀み了つて、第一篇科學としての經濟學に入るに及び評者は高橋教授の本書舊版に對する批評を想起せざるを得ない。曰く「第一篇に移るに及びて、吾人は又た其の結構の雄大なるに驚かざるを得ず、又何人も著者の哲學的智識の富

贍なるを稱せざるを得ずと雖も、各人を以て窈に思ふに第一章第一節以下の七節は野村氏自らが科學の本質を體得する上に意義ありしものにして、讀者は寧ろ第二章「經濟學の科學的地位」のみを以て滿足する者に非ざるなきか。而して吾人は著者が本章における論述の比較的簡單なりしを遺憾とする者なり」（三田學會雜誌第十四卷第八號）と。評者は改版の讀過に際して再びこの遺憾を表現するの止むを得ざるものと感ずるものである。勿論著者は一切の論爭的議論を避けて端的に著者の考を述べるために、草稿における論爭的論議を捨てたと云はれてゐる。乍然評者の切に聞かんと欲する所は、著者の哲學的見地よりする、現代經濟學の批評である。さうしてこの場合において、現代の權威を批評の俎上に登せたりと思はる論爭的議論を聞くことが吾々經濟學の學徒に對して、殊に哲學的素養の全然缺如せる評者の如きものに對して、啓蒙するところ多きことを感ずるからである。この點の不滿を多少吾々に對して充足するものは、第二篇經濟價値の研究であらう。經濟價値論は從來經濟學の根本問題とせられてゐる。この問題に對する著者の見解は多大の興味を以て、讀み得た。勞働價値論を以て、冠履顚倒の議論なりとする論に對する反駁的議論、認識論の立場から理想主義的價値論の體系を樹立したこととは、著者が經濟學說に對する貢獻であらう。

第四版經濟的文化の發展において、經濟的においては、生產が社會的其同的となり、精神的には人類の自覺てふことを文化發展の傾向を論じた著者は、第五篇經濟的文化の極致において、その理想において大約ギルド社會主義的思想を懷いてゐる。

要するに本書を一貫する思想は文化價値の研究である。「文化價値」「文化的生活」等の語は到る所發見せられる。評者の如き哲學の門外漢にあつては、その深い哲學的意義を遂に捕捉することが出來ず、本書の深遠なる意義を了解し得なかつたかも知れない。勿論これは、著者の罪ではなく、哲學的智識に乏ばしい評者の罪であらう。（加田哲二）

文化の諸相と其進路

皷　常良譯

菊版四七〇頁
定價三圓八拾錢
大村書店發行

本書は Dr. F. Müller-Lyer の Phasen der Kultur und Richtungslinie des Fortschrittes の譯書である。著者は文化學の研究に對して自然科學の比較研究法を適用せんとするものであつて、著作の全體は次の如き部分に區分せられる。

第一部　經濟的發達の諸相
第二部　繁殖（愛、婚姻、家庭、親族等）の發達史
第三部　（同族から大國家に至る迄の）社會組織の發達
第四部　人間理解の歷史、即ち言語、智識、哲學的宗教的信仰の發達
第五部　道德、法律幷びに藝術の發達
第六部　生活の意義及び科學

即ちこの著作の全體は初めの五部で專門的の研究をなし、最後の部で一般的、且つ序論的の研究をなすべきものである。それ故に各部は相集つて全體を構成するのである。けれども、各部はそれぞれ獨立の著作であり、獨立に讀むも十分理解せられる（「第一版の序言」參照）。さうして茲に紹介する譯書は右の第一部の研究に係るものである。

本書は六篇に分たれる。先づ第一篇に於いては文化の意義、根源、區分を明かにし殊に人間の生成に就いて面白い記述が試みられてゐる。手、言語、道具、火の利用は必らずしも本書を俟つて初めて明かにせられることではないけれども、新進氣鋭の著者の面目躍如たるものがある。第二篇に於いては食料、道具、住居及び衣服の發達を論じてゐる。此處に於いても吾人は著者の發明になる「相的研究法」によつて、人間の文化生活を如實に見ることが出來る。先史的諸相の研究は必らずしも古生物學にのみ依賴